
速・おとぎ話

廉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

速・おとぎ話

【Nコード】

N9917D

【作者名】

廉

【あらすじ】

いたって普通のメイドと自分勝手な王子との身分違いの恋。はたしてこの2人の恋は実るのだろうか。猛スピードで繰り広げられるおとぎ話的恋物語です。

今よりもずっと未来の話。

地球は東西南北で大陸が4分割され、4つの王国ができあがっていた。

これは西の王国の王子様とメイドとのスピード感溢れる恋物語である。

「シユウ様！シユウ第3王子様！どこにおいでになれますか！？」
東の王国に高くそびえ立つこの城で、太陽の日が昇ると同時に聞こえるのはたぶんこの言葉だろう。

「あ、失礼しますが、シユウ王子様を見かけませんでしたか？」
弱々しい物腰で尋ねてくるシユウ王子の世話係のクラノスケはたいてい王子を捜しているかわいそうな人だった。尋ねられた私はしばらく考えた後、

「いいえ。でも、私も一緒に捜します」

と言ったはいいものの、王子の行き先には大体的見当がついていた。城を最上階まで上り、そこから別塔まで行き、窓から屋根に出る。そう、王子は屋根の上にいるのだ。

私はメイド服であるにも関わらず、よいしょと大股で屋根を登っていった。目当ての人物はすぐに見つかった。

「シユウ王子様！」

茶髪のさらさらとした髪の毛、綺麗な二重の瞳、整った顔立ち。文武両道、才色兼備なシユウ第3王子は地球全体の憧れの的だった。ただ、

「ここにいれば会えると思ったよ。会いたかったよ・・・エリ」
そう言っ、私は王子にぎゅっと抱きしめられていた。

「わー！！！！なにするんですか！！！！？」

「なについていつもやってるじゃないか。朝の抱擁^{ほうよう}。ほんとはおはよ
うのチューがいいんだけど」

けるりとして言つてのける王子はとてつもなく変人だった。メイドとして私が城に勤めるようになってから、何がきっかけかは知らないが、王子のラブコールを受けるようになった。確かに、こんなに嬉しいことはないが、身分の違いに気づいているのだろうか。

「そんなことより、早く部屋に戻ってください。世話係のクラノス
ケさんが王子を捜してましたよ」

気を取り直して私は王子を説得にかかる。

「じゃあ・・・チューしてくれたら戻る」

「はああ？なに言ってるんですか？」

私は顔が赤くなるのを感じた。王子はこうなのだ。わがままで高慢チキ、自分勝手。自分がこうと言ったらこうなのだ。このままだと王子の思ふツボになる。私は右手を高く掲げた。

ばちーん

豪快な音が青空の下に鳴り響いた。

「いってー！！なにもひっぱたくことないだろー！」

「王子の曲がつた性格を元通りにするにはこのくらいしないとダメ
なんです！さあ戻りますよ！」

たぶん場内で王子をひっぱたけるのは私ぐらいだろうとそのとき
思った。

しかし、王子のわがままにも困ったものだった。王子の熱烈なラ
ブコールはすぐに城内中に知れ渡ることになった。私がその話を聞
いたのは、同じメイド仲間からだった。

「いいじゃない。シウ王子と結婚すればいいのに」

そのメイドのランは愉快そうに続ける。

「あんなに素敵な男性二度と現れないわよ。自分が幸せ者だってわ
かってる？」

「わかってるよ・・・でも身分が違いすぎるよ。一国の王子とただ

の庶民だよ」

「愛に身分の違いなんて関係ない！……好きなんですよ？」
その問いかけに私は答えることができなかった。好きだったからだ。この言葉を口にしてしまったら、もう後には引けないような気がした。

「それに今王子の縁談の話があるって話だよ？」

「え！？ほんとなの！？」

「だってシユウ王子も今年で20歳。そろそろだって国王様が話されてたそうよ」

国王陛下に私が呼び出されたのは、それから3日後のことだった。
「最近城内で囁かれていたことだが、貴女が我が息子シユウと婚約したという話は本当かね？」

シユウ王子と違って小柄で太り気味な国王はいつも民衆のことを第1に考える素晴らしい人だ。しかし、婚約なんて話が飛躍しすぎにも程がある。

それは違うと言おうとしたところで、

「ええ。僕はこの女性と結婚したいと思っています」

ややこしいときに王子が現れた。国王はひどく驚いたような顔になった。私は慌てて言葉を探した。

「いいえ！国王様、そのような話は全くございません。噂も根も葉もない話でございます。」

すぐに私は部屋を飛び出した。後から王子が追いかけてくるのがわかって、私はさらに加速して逃げた。こう見えても庶民。温室育ちの王子なんかは足の速さで負けるわけがないと思っていた……ところですぐに追いつかれた。

「王子、目を覚ましてください！貴方はこの国の王子です。私のような庶民とは違うんです！私はもう、王子にからかわれるのは嫌なんです！」

そのとき、右手首を強く握られた。痛さのあまり、私は顔を歪め

る。

「いた……」

「今までずっとそう思っていたのか？ からかっていると思っていたのか？」

私は抵抗して右腕を振り回そうとしたが、王子の力のほうが強かった。

「もう放つといってください！！」

そのとき、強引に壁に体を押し付けられた。そして、噛みつくようなキスをされた。顔の角度を変えて何度もしようとしてくる。私はすぐに足で王子の膝を蹴り上げた。

「王子なんて大嫌い！！」

私は泣きながら逃げ出す。今度は王子は追ってこなかった。

それからすぐのことだった。王子の縁談の話が正式に決定した。

相手は、名のある財閥の一人娘だ。

これで良かったんだ。王子は私のような庶民とは釣り合わない。これで良かったんだ。

そして、シュウ王子の婚約パーティの前日、私は何も考えたくないということだけを考えて一生懸命仕事をした。いつもより掃除を念入りに行った。いつもは仕事としてしないことも行った。

夜の11時頃、私は疲れ果てて自分の部屋に戻ってきた。シャワーを浴びて、ベッドに潜りこむ。

コンコン、部屋のドアがノックされたのはそのときだった。

「僕だけど……」

王子の控えめな声が聞こえてきた。私は無意識にどきつとした。「このまえのことは謝る……でも、父にエリと結婚したいと言ったことは謝らない。それが僕の本当の気持ちだから。だけど、エリの本当の気持ちがあった……」

王子なんて大嫌いと言ってしまったことを思い出した。私は胸が

痛くなってきた。

「今まで迷惑かけて、ごめん」

それだけ言うと、王子の足音がコツコツと鳴り出す。そして、だんだんと小さくなっていく。

これでいいんだ・・・これで。だけど、どうしてだろう。すごく胸が痛い。

私はいなくなったドアに向かって小さくつぶやいた。

「私は・・・シュウ王子様が好きでした・・・ずっと、ずっと・・・」

そのとき、ドアが開いた。

「それ本当？」

開けたのは他ならぬシュウ王子だった。私はええっと驚いてしまった。確かに足跡は聞こえなくなったはずだ。はめられたと気づいたとき、王子だけでなく、そこには国王までもがいることにも驚いてしまった。

「国王様!？」

「いや、すまない。立ち聞きしてしまって・・・君の気持ちを聞いたよ」

「父さん、僕はエリと結婚したい。縁談の話は断るよ」

「待つてください！縁談は決定したんじゃない・・・」

私は驚いて尋ねる。すると、2人の親子にきよとんとされた。

「それは兄貴の縁談じゃないか？明日そのパーティーが開かれることになる・・・」

そこまで言って、王子は国王に向き直った。

「・・・わかった。結婚を認めよう」

いいんかい！？私はつつこみたくなったのをおさえこんだ。国王はにっこり笑って、私のほうを向いた。

「息子をよろしく願います」

物のスピードの速さに私はついていけなくなってきた。嬉しいというよりもむしろなんなの？と聞きたくなってきた。

その後、王子は私を自分の部屋に招いた。私はただ呆然としていた。

「エリ？どうかしたの？」

「いえ・・・なんかこんなにとんぱ子に進むなんて思っていないくて・・・」

「・・・嬉しい？」

私はその問いかけににっこりと笑ってうなづく。今さらになつてようやく実感がわいてきたのだ。

と、急に王子にお姫様抱っこをされた。

「えっ！！？」

驚いている間に、私はベッドにおろされた。そして、優しい顔でじつと見つめられてから、私たちはキスをした。優しいキスだった。

「さて、夫婦初めての共同作業にうつりますか」

「はい！？」

それは、西の王国の王子様とメイドとのスピード感溢れる恋物語だった。

（後書き）

たまにはこういうのもいいかなと思って書いてみました。拙い文章につきあってくださいありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9917d/>

速・おとぎ話

2010年10月8日14時30分発行